

わ ら ほとけ うたが
 我れ等は仏に疑いなしとをば
 せば・なにのなげきか有るべき、
 皇 妃
 きさきになりても・なにかせん天
 うま
 に生れても・ようしなし、竜女が
 りゆうによ
 あとをつぎ摩訶波舎波提比丘尼の
 ま か は じゃ は だい び く に
 列
 れちにつらなるべし、あらうれし・
 あらうれし、南無妙法蓮華経 南無
 と な た ま
 妙法蓮華経と唱えさせ給へ

(御書 976 ページ)

通解

私たちは、仏になることは絶対に疑いないと思えば、何の嘆きがあるでしょうか。

皇妃になっても、また天上界に生まれても、何になるでしょう。竜女のとを継ぎ、摩訶波闍波提比丘尼の列になら並ぶことができるのです。なんと嬉しいことでしょうか。

ただ南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経と、唱えていきなさい。

皆が仏の生命を持った存在

よくわかる解説

本抄は、建治2年(1276年)3月、下総国(現在の千葉県北部など)の女性門下・富木尼御前に与えられたお手紙です。

尼御前は病気を抱えながら、義母の介護に献身し、夫を支えていました。大聖人は、「私たちが仏になることは間違いない。今がどんなに苦しくても、最後に必ず成仏すると確信すれば、嘆く必要はない」と、尼御前の不安が払拭されるよう、励ましを送っています。

本来、仏法では、ありのままの姿で、自身に負わぬ「どんな困難にも負けない境涯、を顕すことが成仏であると説きます。この境涯を顕すために、私たちは悩みに向き合いながらも、日々、題目を唱えているのです。苦悩に覆われていても、そのまま仏の智慧が輝く自在の身となる。この法理を「煩惱即菩提」といいます。

あるメンバーは高校入学後、人見知りの性格に悩み、

友人と本音で話すことができずにいました。その中で朝晩の勤行に挑戦し、祈っていくと、自分から笑顔であいさつすることが大事だと気づき、実践していこうと決意。すると、徐々に本心で語り合える友達を増やすことができたのです。社会人となった今では、その友人と励まし合いながら、使命の場所で奮闘しています。

皆さんは一人ももれなく、「仏の生命」を持った尊い存在です。題目を唱え、悩みに向き合うことで、自身の仏の生命が輝いていきます。そして、どんな困難も乗り越えていくことができるのです。

池田先生は教えられています。「輝くためには、燃えなければならぬ。燃えるためには、悩みの薪がなければならぬ。青春の悩みは即、光なのだ」

さあ、いよいよ夏本番! 日々の勤行・唱題で、自身の仏の生命を輝かせながら、全てに勝利する「鍛えの夏」を送っていきましょう!